紅と蒼(仮)

ピンクマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅と蒼（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９９５６Ｙ

【作者名】
ピンクマン

【あらすじ】
少年はある日、見てはならないもの――いや、見なければよかったもの――を見てしまう。それにより、少年の日常は大きく歪む。
追われる存在、自身に隠された秘密、そして……異能の力。
一晩の出来事によって少年は全てを知るために学び、励み、自身の身の潔白を証明するべく闘うこととなる。

やがて青年になった彼は、密かにその時を待つのであった。
様々な人に触れながら……。
※他サイトとの重複投稿作品です

惨劇

「はぁ……はぁ……」

所々で紅の炎が燃え盛る闇の中、黒髪の少年は息を切れ切れにしながらひたすら走る。

その表情は、何者かに怯えているかのように恐怖心に駆られているもので、時折後ろを振り返りながら、ただひたすら燃え盛る家が建ち並ぶ大通りを駆けていた。

空は一面闇に覆われていて、電灯がなければ辺り一面真っ暗闇というのが普段この大通りの夜というものなのだが、今回ばかりは状況が違っていた。

少年が必死に駆け抜ける大通りの両側にはいくつもの家屋が見受けられるが、その全ての建物から鮮やかな、しかし人々を恐怖に陥れる紅の炎が燃え上がっている。

「あっ」

少年が後ろに気をとられていると、不意に足元の何かに躓き転倒してしまう。

全速力で走っていたため勢いよく倒れてしまい、今ので擦れたのか、右脚からは僅かだが血が出てきている。

普段ならここで何に躓いたのかを確認するなり、擦れた部分に唾をつけるなりするのだが、今回ばかりはそうもいかなかった。

「早く……逃げなきゃ」

恐怖はすぐそこまで近付いているのだ。

脚の痛みに耐えつつ、すぐさま立ち上がり、再び駆け出そうとする少年だったが――

「みぃつけた」

――不意に背後から聞こえた男性特有の低音の気味の悪い声に、思わず体が硬直してしまう。

少年はそのままゆっくりと顔をを後ろに向け、声の主を確認する。確認せずとも、つい先ほどまで耳にしていた声と一致するため、そこに恐怖の対象がいることは分かっていた。

顔を向けた先にいたのは、やはり自分の恐怖の対象であり、この真夜中にいつもとは違う、平和とはかけ離れた光景を作った張本人である。

白髪交じりの金色のオールバックに、ふっくらと脹らみ脂ぎった顔。耳には金色に輝くピアス、首には銀色に輝く豪華なネックレス、腕には金色の宝石が鏤められたブレスレット、茶色のスーツを破らんばかりの苦しそうなお腹、太さの割りに短い脚、闇夜に紛れる黒い革靴を装備した強面の男だ。

顔はお世辞にも整っているとは言えず、不細工という言葉が相応しいだろう。

男は目の前で震え上がっている少年を見やると、口元を僅かに吊

り上げ、いやらしく微笑みながら一歩、また一歩と少年に近付いていく。

恐怖から脚が動かないのか、両手を使って一生懸命距離を保とうとする少年の行動を見て、男はにやにやとしながらゆっくりと口を開く。

「よくここまで逃げたもんだが、そろそろ観念したらどうだ」

「だ、黙れ！！　お前こそ観念したらどうだこの悪党！！」

男の言葉に、手は止めずに脚とは違い自由に動く口で精一杯の強がりを口にする少年。それを聞いた男はよほど面白いと思ったのか、大口を開け下品に笑い始める。

「私が何に観念するって？　状況がまだ分かってないようだな……。それに、悪党は私ではない」

「な、何を言ってるんだ……」

男の意味不明な発言に、思わず首を傾げる少年。ふと、つい先ほど自分が目撃してしまった光景を思い出す。

そこでは、街外れの倉庫で何やら紙切れを持ち出す男の姿があった。

男は相変わらず脂ぎった顔でにやにやと気味の悪い笑みを浮かべ

ながら、鍵を破壊して侵入したらしい倉庫から出ると、隣に立っていた黒マントの怪しげな雰囲気の漂う男に向かい、小さく右手を上げる。

するとそれが合図だったのか、黒マントの手から倉庫に向かって放たれる炎の矢。黒マントの手に弓矢は確認できず、右手を倉庫に向けただけで炎の矢が放たれたことにいささか疑問を感じた。

ありえない光景を目にし、動揺してしまった少年は思わず後退し、その場に落ちていた木の枝を踏んでしまう事で、自らの存在を知らせてしまうのであった。

「ちょうどいい……」

少年の姿を発見した男がそう呟くのを聞く前に、その場から駆け出す。物凄い危機感を感じたのだ。見たことの無い力で一瞬にして倉庫を燃やした黒マントの男に。

次は、自分があの倉庫のようになってしまう。そう感じた少年は考えるよりも先に体が動いていた。

……この場にいたら決して怪我では済まないと。

街が炎に包まれたのはそれからすぐのことだった。あまりに突然の出来事に、人々は驚き、理解に苦しむ様子を見せるも、逃げるという行動を本能が導き出したのか、人々はすぐに街から撤退していた。

一人逃げ惑う少年を残して。

そこまで振り返った少年は、「ち、違う！！　お前が悪党だ！！」と、震えながらも怒声を上げる。

そんな様子を滑稽に思えたのか、男は右手で口を押さえながら「くっくっくっ」と笑いを堪えながら、今だに震えの止まらない少年に対し口を開く。

「確かに、この街を現在の状況にしたのは私だ。だが、このような状況に陥れたのは貴様だ」

「な……！！　俺は何もしていない！！」

男の口から放たれるあまりにも滅茶苦茶な言葉に、少年はこれまでに無いほどの大声を上げる。

そんな動揺の隠し切れない少年に、男は「そうとも……」と呟き、更に話を続ける。

「だが、こうなったのは貴様のせい。それは揺ぎ無い真実だ。この街一番の権力者の私が証人なのだ。誰も疑うことはあるまい。それに……死人に口無しと言うしな」

そこまで言うと、突然男の前に現れる黒マントの男。そう、この街を現在のような火炎地獄に陥れた張本人だ。

「始末しますか？」

男の前に現れた黒マントは、男の低音の声とは違い、綺麗なテノールの声でそう尋ねる。

黒マントの問いに、「あぁ、やれ」と懐から葉巻を取り出しながら言う男。

その言葉を合図に、黒マントは右手から倉庫を燃やしたのと同じ、炎の矢を出現させる。

その様子を感じ取った少年は、ようやく硬直のとけた体を起こし、男達に背を向け再び走り始めるが、それは無意味に等しいもので、黒マントの放った炎の矢が背中にヒットする。

「ぐっ……」

炎の矢と言っても、本物の矢とは違い少年を貫通することは無かったが、背中に激痛が走る。

死にはしなかったものの、再びその場に転倒してしまい、文字通り絶体絶命という状況に陥ってしまう。

この状況に思わず絶望してしまう少年だったが、真実を街の皆に伝えるべく、両手を使って必死に地面を這う少年。

「ほぅ、まだ息があるか。ならば、これで止めだ」

そう言い、右手に先ほどと同様細長い炎の矢を出現させる。だが、先ほどと違う点が一つだけあった。

炎の矢は一本ではなく、複数出現していたのだ。

「終わりだ」

右手に出現させた複数の炎の矢を少年に向けて放つ黒マント。放たれた矢は物凄い速さで少年に向かい、轟音と共にその場が燃え上

がる。

「やったのか……？」

相当大きな音だったのか、男は両手で耳を塞ぎながら黒マントに尋ねる。

素顔を隠すためなのか、顔にマスクをしている黒マントの表情を読み取ることは困難である。しかし、何となく煮え切らないような表情をしている彼の様子に、男が気付く気配は無い。

「いえ、あれはあのような爆発が起こる”能力”ではありません。恐らく、何者かが介入し、少年を逃がしたのかと。念のため、手配書を作っておいた方が良いかと。万が一この街に戻ってきた時のために……」

それだけ言うと、黒マントは再び男の前から姿を消した。

黒マントは少年を消し損ねたことに若干イラついている様子だったが、男はそんな事を気にする様子も無く、ただ自分の計画が上手くいっているのを喜ばしく思うだけだった……。

盗賊

それはまさに痛々しい光景であった。

村を守るためであろう柵は破壊され、畑は荒らされ、辺りには砂埃が舞っていた。歓迎しない訪問者が来たせいだ。

ぼろのマントを羽織った訪問者――辺り一帯に出没する盗賊団である――はたまに村にやってきては村を荒し、食糧を奪っていく。

現れたての頃は幸い全てを持っていかれることがなかったため、なんとか村を建て直し生活するということが可能だった。

それでも、彼らの訪問に怯える日々なのは変わりないのだが、生きていく上で重要とされる食糧が幾分か残るということは、とても大きかった。

しかし、最近になって彼らは村に保管されている”全ての”食糧を要求するようになってきた。当然、そんなことをされては生き延びることすらできない。

村人は抗った。村に住む男衆が徒党を組んで抵抗した。しかし、場馴れをしている彼らにとっては赤子を捻るも同然だ。男衆はたちまち敗れ、当然のごとく食糧を奪っていく彼ら。

普段ならばこれで済むはずだった。だが、今回ばかりは違った。無理に抵抗したのがいけなかったのだ。

村人の細やかな抵抗に彼は苛々していた。彼は自身の邪魔になるものが嫌いだ。それも、狩られる側が抵抗するなどなおさら。

彼は怒気を発しながらこう言い放った。――「女だ」と。

村の女が身を震わせるも、彼は続ける。

「お前たちは一番やってはいけないことをした。俺は邪魔者が嫌いなんだ。虫酸が走る。　俺の気分を悪くした償いだ。歯向かってきた男どもの妻を出しな。今日のとこはそれで勘弁してやる」

男の要求に「しかし……」と村長は渋る。悪の塊のような連中が奪っていった女の末路など、考えなくてもわかる。だが、その反応を見た彼はさらに苛々が増してきたのか、大きく舌打ちをし、顔を歪ませる。

「しかし……じゃねぇんだよ。これはお願いじゃない。命令だ。てめぇら弱者に拒否権なんざねぇんだよ！」

”弱者”といえ言葉に思わず村人全員が顔をしかめる。だが、事実であると認めるかのように俯く。村長が決断に悩むなか、一人の女が前に出る。

「あたしが行くよ」

そう言って村人達の前に出る一人の女。

「リーナ……」

リーナと呼ばれたその女は、一見身体の線が細く思われるが、胸部が大きく突き出ているため全体的に体格が良い印象がある。また、顔は整っていて美人の部類に入るだろうが、どこか気の強そうにも見える。

村長は自ら出てきたリーナに心配そうに声をかけるが、「構わないよ」と一蹴され、村長はやむなく引き下がる。

その様子を眺めていた彼は「ほぅ」と漏らしリーナの全身を舐め回すように眺める。

「女。いい覚悟だが、果たしててめぇ一人で俺達を満足させられるか？」

彼が下衆な笑みを浮かべると、それに釣られるよう盗賊達は皆同じ様な笑みを浮かべる。その様子を眺めていた村の女達が震えを抑えるように身体を抱く中、リーナだけは小さく笑みを浮かべた。

「アタシのテクは凄いよ？」

怯むことなく当然のように返すリーナに、彼は一瞬驚くも、すぐにそれは笑みに変わり、「おもしれぇ女だ。気に入った。てめぇ一人で勘弁してやる」と、リーナの腕を掴み部下の盗賊達を連れ村を後にした。

盗賊団の後姿が完全に見えなくなったのを確認した村長は、緊張が解けたのか、崩れていくように地に膝をつく。そんな気の抜けた村長を尻目に、村人達は先ほどまでの状況を頭の中に思い浮かべ、その恐怖感で動揺し始めた。

その中から、数人の男が膝をついてやや放心状態に陥っている村長に近づき、声を荒げる。

「村長！　これからどうするんです！」

「このままでいいんですか！？」

「しかし、我々の力では到底敵わない……」

「そうだ、騎士団だ！　騎士団に頼めば……！」

未だ放心状態である村長を置いて話を進める男達……だが。

「それは……無理だ」

村長が力なく答えると、当然の如く「何故！？」という疑問の声。もちろん、村長とて騎士団に掛け合ったことはあった。いや、何度も何度も文を出し、状況を説明していた。しかし、騎士団は一向に動く気配はなく、文が返ってきたことすら一度もない。

村長はありのまま話した。これできっと仕方ないと村の者達は思ってくれる。そう信じてやまなかった。しかし、実際村長に返ってきた言葉は――

「なら直接向かうのが普通だろ！？　あんた本当に俺達の長か！？」

――悲しいかな、村の男からの怒声だけであった。

騎士団

暖かな陽の光が照らす空は、彼の心情とは裏腹に青く澄みきっている。都に近付くにつれ、これまでの何もない田舎道とは異なり、人々の活気に満ち溢れた様子が見られるようになる。

そしてふと、彼はここまでの事を思い出そうと顔を空に向ける。あっという間の出来事であった。

村の男達から一斉に非難の声を浴び、追い出されるかのように村を出発し、村の長カイルは騎士団が拠点を置くここ士都へとやってきた。当初、彼にとっては不本意であったが、よくよく考えると長としての務めがしっかりできていなかったと、気持ちを切り替えつつ騎士団の元へと向かう。

カイルが長を務めるサリーの村は、広大な敷地面積、多数の人口を誇る士都の南側の外れに位置するいわゆる辺境の村であるため、彼自身ここを訪れることはほぼゼロである。そのため、あまりの人の多さ、活気のある都の姿に戸惑いを隠せずにいた。

人々の活気に圧されつつも、彼は”騎士団南支部”とでかでかと掲げられた看板を目にすると、「ここか……」と呟き恐る恐るという感じでその扉に手を伸ばしつつ、ふと周りを眺める。

そこにはやはりというか、当然のように村とは違う景色が広がっていいた。

都に溢れる人、その中でもこの士都の名に相応しく、武士や剣士といった出で立ちの姿が多く見られた。また、建物の造りもまた違う。とはいっても、村の住居も都と同じくしっかりとした木造建築なのだが、都のそれとは建物の高さや広さがまず違った。そこに建

物ごとに違う染色や装飾が施されており、自分がいかに田舎者なのかというのを嫌でも実感してしまうのであった。

そうしているうちにも、中の様子が伺えるほど扉は開かれ、瞬間扉に手をかけていた右手に力を入れ、自身が通り抜けられるほどのスペースを作り出す。中からは所属しているであろう騎士が慌ただしく動き回っており、また、中央手前にある受付カウンターが仕切りとなって、付近には彼らに依頼をしに来たのであろう人々が各々待機の姿勢を取りながら立っているのが見られる。

カイルは建物の中に入ると、まず受付カウンターにて話をつける。ここでは、列による混雑を無くすために”整理札”と呼ばれる数字の書かれた札を配っており、順番が来るとその番号が呼ばれて初めて依頼をすることができるのである。

それからしばらく経ち、彼はふとカウンターの方に目を向ける。すると、彼の持つ札の一つ前の番号で呼ばれた若い男が受付を背にして歩きだしたのが見えた。ようやく彼の番が来たのだ。するとすぐに受付の騎士が彼の持つ札の番号を読み上げたため、入口付近の壁に背を預けていたカイルは、不安な表情を浮かべながら声の主の元へと歩み出す。

「御足労ありがとうございます。こちら騎士団南支部でございます。本日はどのような御依頼でしょうか？」

受付を担当する騎士は依頼主であるカイルに対し、マニュアル通りといった対応を瞬時に行う。それに対し、カイルは周りの雰囲気にのまれながらも本来の目的を果たすべく口を開こうとしたが、何かを考えるようにすぐに口を閉じてしまい、一瞬考え込み再びその口を開いた。

その一連の動作を何気なく観察していた受付の騎士は、これまでの経験からカイルが田舎者であると容易に推測できた。ただ単に人と話すのが苦手だという線も考えられなくはないが、入ってきた途端に辺りを執拗に見渡すあたり、間違いないと思っていた。

それと同時に、不謹慎ながらも面倒臭いと思ってしまう。田舎者だと思われる者がわざわざ士都まで依頼に来る時は、大抵よほど大掛かりな依頼であるか、もしくは――

「以前からこちらに盗賊団を捕えてほしいという旨の文を何度か送らせていただいたのですが、一向に返事が返ってきません。私どもとしてはこれ以上盗賊団に怯えて過ごすのは我慢できないのです。一体いつになったら私たちはまた元のように暮らすことができるのでしょうか？」

――依頼の旨を記した文に返事も何もしていないということだ。彼は正直いい加減にしてくれと思った。もちろん、目の前のカイルに対してではなく、”あの”いい加減な男にである。彼は一瞬男の顔を頭に思い浮かべ、よくそれでこの支部を任せられたものだと心中で悪態をつくと、「少々お待ちいただいてもよろしいですか？」と精一杯の笑みを作って言い、カウンター奥にある階段から2階へと上がり、男がいるであろう応接間へと向かった。

応接間に着くと、確か今日は本部からわざわざ団長が来ていたはずだと扉を目の前にして躊躇する彼だったが、それも一瞬のこと。「知るか」と舌打ち混じりに小さく洩らして扉を開ける。……ノックをしないでだ。

やはり何か重要なことでも話していたのだろうか。突然開けられた扉にその場にいた二人の男がこちらを向いて目を見開いている。明らかに信じられないといった様子だった。

応接間は客をもてなす為か、やや広々とした造りになっているが、壁際に設置されている本棚、部屋中央に位置するテーブル、対面になるよう置かれたソファーが二つとあるおかげで、それほど広さを感じさせない空間であるが、同時に不自由することはなさそうだ。ソファーは扉を背にする形に一つ、その対面側――こちらは街並みを見渡せる窓が背にくるようだ――に一つという配置になっており、窓川にはここ南支部を仕切る支部長、そして扉側には本部から来たという騎士団長が腰掛けていた。

「おいお前、部屋に入るときはノックをだな……ったく、ただでさえ今日は本部から団長がいらしているというのに……」

突然開かれた扉に驚いたのも束の間、背が高く筋肉質な体付きをしている男は後方の窓から指す陽の光によって見事に光る禿げ頭を入口付近の男に向け、明らかに苛立っているという様子で言葉を投げつける。

筋肉男――南支部の支部長である――の言うことはマナーとしては最もな言い分である。もちろんそんなことは分かり切っていた。しかし、元々の原因が支部長の無責任さにあるため、男は思わず不満を表わすかのように顔を顰めてしまう。当然、そのような顔をしてしまえば支部長も更に御機嫌斜めになるわけで……。

「貴様、その態度はな――」

「まぁまぁ。少しは落ち着けアイザック」

しかし、それはアイザック支部長の対面に座るこちらも体格のいい男に宥められる。短く切り揃えられた白髪交じりの黒髪に、口周りを囲むように生い茂る無精髭を生やしたその男は、アイザック同

様体格がいいのだが、彼よりも背が高く、筋肉質というよりも大男という方が正しい表現だろう。

「しかしだなヴォルガン……」

「どうせまたお前のだらしなさで苦情でも来たんだろう」

ヴォルガンと呼ばれた騎士団長に宥められたことに、納得がいかないという様子のアイザックだったが、続けて発せられた予想に、思わず言葉に詰まってしまう。彼の言う事が最もだという事は、自分でも分かっているからだ。だが、これは予想であって予想でない。大抵自身がいる部屋にノックもせずに人が入ってくるという事は、即ちそういうことだからだ。彼の昔から直らない悪い癖――とはいっても、単にだらしがないだけだが――である。

直接依頼をしに来るには距離がある、要人警護のために人をよこすことができない。といった理由で時折文書にて依頼の要請がくることがある。当然、人が直接来ようが紙媒体で来ようが依頼は依頼なため、騎士団としてそれに全力で当たらなければならない。アイッザクもそれくらいは心の奥底で理解しているつもりだ。

しかし、騎士団南支部は近年騎士団員の人材不足に悩まされており、依頼の順番待ちも決して少なくはない。南を含む5つの支部の中で実績があまりよくないという自分達――とは言っても、大抵の騎士はだらしがないで有名なアイザックの元で働きたくないだけだが――の責任とはいえ、やってくる依頼に対して騎士の数があまりに少ない。そのため、順番待ちの旨を文書として返さなくてはならないのだが、やはりというか、アイッザクはそのようなことは一切やらないのである。

その結果、このような状況は日常茶飯事であり、南支部に仕える

騎士たちの不満は日に日に募るばかりであった。頭では理解しているものの、自分に都合の悪いことは受け止めたくないという傲慢さ――考え方が幼いともいう――を兼ね備えたアイッザクとしては、なんとしても部下のせいにしておきたかった。特に今日という日は、かつての同期である騎士団長がいるのだから尚更である。

「それで、用件は？」

「サリーの村の者から、文の返事が来ない事に対する苦情です」

渋々といった様子で部下から状況を伺うアイザックだったが、自身……いや、ヴォルガンが予想した通りの答えが返ってきたため、ますます不機嫌になってしまう。

「あー、盗賊団の件か。派遣できる部隊がいないからその旨を記した文書を送るように言ってあったはずだが」

「いえ、聞いておりませんが。そうやってすぐ我々のせいにするのはいい加減勘弁して頂けないでしょうか」

いっそ部下の不始末にしてしまおうという企みも、淡々と否定と不満を返す部下に一蹴されてしまい、思わず「ぐぬぬ……」といった奇妙な唸り声を上げてしまう。

そんな二人の様子を見ていたヴォルガンがわざとらしく咳払いをすることで、それまで睨み合っていた上司と部下の関係に当たる二人は、慌てて口を噤み声の主に身体を向ける。

「今君たちが言い争っていても始まらないだろう。今、その村の御仁は？」

「あ、はい。受付カウンター前にて待っているかと」

「うむ、では私が行こう」

そう言うが早いか、後から聞こえるアイザックの制止の声など聞こえていないかのように、ヴォルガンは部屋を訪れていた騎士に案内を任せ、応接間を後にする。

「お待たせしました」

受付をしていた騎士がカウンター後ろの階段から姿を消してから少しして、ようやく戻ってきた彼の声に気付いたカイルは、ようやくか……と内心洩らしながらそちらに目を向ける。

すると、騎士の後ろには先程までは見られなかった２ｍは超えていそうな大男の姿を発見する。騎士が連れてきたところを見ると、ここの責任者か何かだろうか。と、カイルは軽く予想してみると、大男の口から彼の予想の遥か上の答えが返ってくることになる。

「初めてお会いするな、サリーの村のお方。私は騎士団本部の団長を務めているヴォルガン＝アーサーという者だ。以後、お見知りおきを」

「本部の……団長！？」

あまりの出来事にカイルの情報処理能力が追い付かず、ついつい間抜けな面を晒し、気の抜けた声を上げてしまう。それほどこの場に場違いな人物だったのだ。もちろん、何らかの用事でここ南支部に来ていたものだと思われるが、それでも一介の村人如きが拝める人物ではないのだ。

そんな彼の驚きをよそに、ヴォルガンは申し訳なさそうな顔をしながら話を続ける。

「この度はこちらの不備で村の方々には大変迷惑をおかけした。騎士団を代表して謝罪をしよう。申し訳ない」

すると、なんと本部の団長だという大男が自分に対して頭を下げたではないか。もちろん、この場合別に間違ったことではないのだが、カイルはまさかここに来て騎士団の代表格である男から謝罪をされるとは思ってもみなかったため、突然の出来事に驚きを隠すことができない。

不思議なことに、この一連の流れによって先程まで渦巻いていた不満も、一気に解消されてしまった。これこそが騎士団側の狙いであるという捻くれた考え方もできるのだが、この時のカイルにはそのような考えをするだけの余裕は残されていなかった。

「さて、盗賊団から村が襲われているという件だが、生憎こちらの支部は人材が不足しており、すぐに部隊を向かわせることができない状況なのだ」

驚いているのも束の間、騎士団がすぐには駆けつけられないという最悪ともいえる答えが返ってきたため、急に現実に引き戻された感覚に陥るカイル。彼は気持ちがすぐ顔に出てしまうタイプなのか、その表情はいつの間にか悲しみに満ちたものへと変わっていた。

それを見てか見てないかは分からないが、「しかし……」とヴォルガンは続ける。

「実はサリーの村の近辺に位置する他の村からも、同じように盗賊団討伐の依頼がきているた。そおため、この一件をこれ以上先延ばしにすることはできない。これ以上の被害を早急に抑えなければな

らない。そこでだ――」

そう言いながら不意に辺りをきょろきょろとし始めるヴォルガン。急に辺りを見回す大男の姿につい首を傾げてしまうカイルをよそに、ヴォルガンが首を動かし続けていると、すぐにぴたりと首が固定される。そして一点を見つめるヴォルガン。その視線の先にいるのは――

「えーっと……もしかして自分でしょうか？」

――騎士というにはあまりに弱々しい、おろおろした青年の姿だった。彼は他の騎士同様、胸元の龍を象ったエンブレムが特徴的である白銀の鎧を装備しているが、その風貌や雰囲気から、着られているという印象が強い。

顔つきは幼く、どこか男らしさというものに欠けた中性的な顔立ちは、騎士の象徴たる白銀の鎧とは似ても似つかぬものだった。

「うむ、君だ。あーっと、確か――」

「あっ、シリウスです」

「そう、シリウス君。すまんがそこの御仁をあの便利屋のとこまで連れて行ってくれないか？」

「はい、わかりました」

では、行きましょうか。と言ってカイルに目を向けるシリウス。今し方交わされた会話から、便利屋という単語が聞こえ、あまり良い予感がしないものの、騎士団長の考えと思うと仕方なしにシリウスの後に付いていくカイルであった。

二人が支部を出て行った直後、カウンター近くで相も変わらず「ぐぬぬ……」と唸り声を上げる禿げ頭の姿が目立ったが、その様子を建物内にいる者全員が見て見ぬふりをしたのは言うまでもあるまい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9956y/

紅と蒼(仮)

2011年12月2日00時58分発行